

松任谷正隆の

# 僕のひとりごと

14

## VOL.14 2つめのバンド

高校生の終わり頃、組んでいたブルーグラスのバンドを解散した。

理由は簡単。リーダー格だったバンジョーのKがアメリカに留学に行ったからである。

早い話が彼にとってバンドは二の次だったわけだ。

バンドがなくなると、僕はなんだか錨を失った船のような気分になった。どうも落ち着かない。

何をやるにも身が入らない。早く次のバンドをやらなければ・・・。

次のバンドはあっさりと決まった。実を言えば、どういう経緯でそのバンドをやることになったんだか  
はっきりと覚えていないのだが、今度のバンドは3人編成で僕以外は2つ年上の大学生だった。

一人は慶應、一人は成城。今度は少しだけ都会的なカレッジフォークだった。成城の人の家で主に練習をした。

彼の家は井の頭公園近くの閑静な住宅街にあった。はっきりとは覚えてはいないが、  
中2階があるような広い家だった記憶がある。

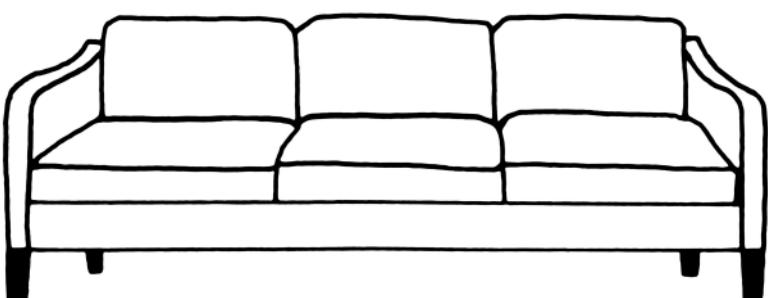
それもそのはず、彼のお父さんはあのソニーを立ち上げたメンバーの一人だったから。

当時僕の目には、ソニーは最先端を行っているイメージがあった。

玄関を上がって右側の部屋が大きな応接間。

四角めなソファが印象的で、僕の家の家具の倍くらい大きかったんじゃないかな。

そしてその奥の一段上がったところに和室があり、仕切りはいつも開けられていた。



僕らは和室に楽器ケースとかを置いて、長いソファーの前で立って練習をした。

カレッジフォークにはマイクは要らない。

ギターさえあればどこでも練習出来るわけだが、やっぱりちょっと贅沢な部屋で練習するのは気分が良かった。

夕方になるとお母さんが夕食を作ってくれた。ごはんですよ、という声が聞こえると、

僕らはさっさと練習を切り上げ、玄関から入って左側にあるダイニングに移動した。

ここは天井が斜めになっており、さらに窓が遠くにあるせいかどちらかというと薄暗い。

つまり照明がうまいこと映えるわけだ。そんなマジックからか、何を食べてもおいしかった記憶がある。

実際に料理が上手だったのだろう。

慶應の先輩の方は、いつも歯の浮くようなお世辞をお母さんに言い、

僕は毎回、こんな大学生にはならないぞ、

と心の中で呟いた。



そういえばメンバーが

もう1人いたことを思い出した。

それはマネージャーだ。

アマチュアのくせにマネージャーと称する人がいたのだ。

マネージャーの役割は何かと言えば、ただ聴いて意見を言うだけ。

誰と交渉するでもなく、ただただ座っているだけ。やはり僕の2つ上で、学校は成蹊だった。

彼の家でも練習することがあったが、なにせ高幡不動だからそうとう遠い。

それでも苦にならなかったのは、やっぱり若かったということなのだろうか。

それにしても、僕にとって青春という言葉が使えるのは、たぶんこの短い期間だけなんだろうな。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。

イラスト：W.Valy